

楽曲解説

[解説] 一柳 富美子

2
23

2
26

2/23(木) 第107回東京オペラシティ定期シリーズ

2/26(日) 第890回オーチャード定期演奏会

ストラヴィンスキー(1882-1971)

ロシア風スケルツォ(シンフォニック版)(約4分)

ストラヴィンスキー(1882-1971)は作曲家としての経歴の比較的初期から新時代の大衆音楽に関心を示し、ラグ・タイムなどジャズ風の作品も手掛けてきた。米国時代のこの『ロシア風スケルツォ』もその一つ。「シンフォニックジャズ」の生みの親であり、ガーシュインに『ラプソディ・イン・ブルー』を発注したポール・ホワイトマン(1890-1967)率いるホワイトマン・バンドの委嘱による。1943~44年に作曲したジャズ版の後でストラヴィンスキーは1944~45年にシンフォニック版も書き上げた。両者は編成が異なるだけでなく、ジャズマンかクラシック奏者かという演奏者の違いを想定した細かい編曲の違いがある。シンフォニック版の初演は1946年3月、サンフランシスコ交響楽団と作曲家自

身の指揮によって行われた。

裏打ちリズムが印象的な軽快なスケルツォ主題はト長調、4分の2拍子。中間部副主題が二度挟まれる明快なABAB'Aの形式。このスケルツォ主題はバレエ『ペトルーシカ』第4場で民衆たちが夕景の復活祭の市場を歩き来する音楽、特に「御者の踊り」に酷似している。実際、副主題Bは同場面で何度か引用されたロシア民謡「若い私は酒宴で」(譜例1)に基づく変奏で、この作品が「ロシア風」という名を持つ由来となっている。曲は3度目に主題に戻ると何の余韻も残さず唐突に終わる。

[楽器編成] フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(シロフォン、タンブリン、トライアングル、ハイハット・シンバル、大太鼓、小太鼓)、ハープ、ピアノ、弦楽5部

● 譜例 1



● 譜例 2



● 譜例 3



シェイ帝国の魔の庭園を描写した不気味な音楽に続いて、イワン王子に追われて火の鳥登場。そして庭園に実る黄金の果実と戯れる火の鳥の踊り。

- ② **パントマイム I**: 舞台転換の役割に相当。30秒に満たない。
- ③ **火の鳥とイワン王子のパド・ドゥ**: 火の鳥は王子に捕らえられ、王子に懇願する。
- ④ **パントマイム II**: 次のシェーナへの準備。これも I 同様に短い。
- ⑤ **スケルツォ(王女たちの踊り)**: カッシェイに囚われて魔法に掛けられた13人の王女達が登場。黄金のリンゴと戯れる。
- ⑥ **パントマイム III**: 朗々としたホルンが印象的な、長めの舞台転換。
- ⑦ **Rond(輪舞)**: 王女たちの美しい輪舞。実際のロシア民謡の輪舞「緑萌える庭の中を」(譜例 2) が主部主題に

使われている。

- ⑧ **カッシェイの魔の踊り**: 一転して音楽は邪悪なオーラを放つ。魔王と手下たちのグロテスクな踊り。トロンボーンのリッツァンドが有名である。
- ⑨ **子守歌**: 踊り疲れた魔王の一味が眠りにつく。「バーユ・バーユ」というロシア民謡定番の寝かしつけのモチーフが支配する。
- ⑩ **終曲の讃歌**: カッシェイ王国の消滅、石化していた戦士たちの復活と大団円。旋律はロシア民謡「門のところで松の木が揺れる」(譜例 3) をそのまま引用、何度も繰り返しながらクレッシェンド一つで見事に処理して華麗な終幕を迎える。

[楽器編成] フルート2(2番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(小太鼓、大太鼓、シンバル、トライアングル、タンブリン、シロフォン)、ハープ、ピアノ、弦楽5部

ひとつやなぎ・ふみこ(ロシア音楽学) / 東京藝術大学講師。ロシア音楽研究の第一人者。ロシアオペラ・声楽・ピアノに特に造詣が深い。ロシア音楽研究会主宰。ロシアン・ピアノ・スクール in 東京総合監修。研究・執筆、声楽指導、音楽通訳・翻訳・字幕を手掛け、邦訳した大曲だけでも50を超える。